時間逆行！人生のやりなおし！！

フリスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時間逆行！人生のやりなおし！！

【Ｎコード】
Ｎ８４０２Ｓ

【作者名】
フリスト

【あらすじ】
病弱だが毎日を楽しく生きている夕月夜絆。だが夜絆は小さい頃からの病気が本格的に牙を向き、生と死の境目で彷徨った
そこで自分の人生の転機に出会う。自らの運命を変えるために夜絆は自らの過去に戻る決意をした

プロローグ1（前書き）

なんか気分的に書きたかったので投稿します
気分的に書いてるものなのでかなりおかしい所があるかもしれませんがどうか長い目で見てください

プロローグ1

ｓｉｄｅ　？？？

「ふぁ～よく寝た」

朝日が昇る前の時間帯に俺は目覚めた。なぜこんなに早く起きたかというと十日ぐらい学校を休んでいてその間ずっと寝たきりだったから。ま、要は毎日寝すぎて眠気がまったくないってこと
俺の名前は夕月夜絆。私立不動高校に通う高校二年生だ。幼い頃から重い病気にかかっているせいか髪が白髪になってしまった

「ああ～寝すぎて身体中が痛い」

平日にこんな事を言える俺は幸せものだと思う。普通の学生や社会人はこんな時間帯に起きたら二度寝をしたくなる時間だ

「とりあえず、下に降りるか」

眠気が完全に無くなった俺は自分の部屋から出て一階のリビングに下りる

「何すっかな～？」

〔ニャー！〕

俺がリビングをうろついていると家の家族である黒猫の黒がいた。
名前をつけた俺が言うのもなんだが安直過ぎる気がする

「ん、なんだ、黒か。お前は朝早いんだな」

〔ニャー！ニャー！〕

「はいはい、わかってるって」

黒が二回以上鳴く時は、飯を作れかドアを開けろの二つに一つである。そして今回は飯を作れしかないので俺は決められたフードを取り出し皿に盛って黒の前におく

〔ニャー♪〕

黒はガツガツと飯を食っている

「あれ？そういえばお前昨日は樹理と寝てたんじゃないのか？」

樹理って言うのは俺の一つ下の妹で現在高校一年生で一応同じ高校。だけど妹に用事なんか基本無い俺は学校で会うことは少ないので妹が高校で何をしているのか全く知らない

話を戻すけど黒は俺か樹理といつも寝ている。そして昨日は樹理と一緒に寝たはずなのに何故かここにいる黒

「さてはお前、脱走してきたな？」

〔ニャー！〕

たぶんだが樹理は寝る時ドアを少し開けて寝たのだろう。黒はその僅かな隙間から部屋を出てこの一階に来たようだ

「まったく…お前がいないと樹理が寂しがるだろ？」

〔ニャ！〕

「…まぁ、俺がお前だったら逃げ出したくなる気持ちもわかるけどさ」

樹理はいつも黒をぬいぐるみの様に抱えて寝ている。黒は抱えられて寝るのがいやみたい。俺もやられたら嫌だもん。へ？異性に興味ないのかって？異性に興味はあるけど妹は対象外だし、なにより絶壁だからたぶん感触悪そう

「ま、いいか。お前はそこで飯食ってろ。俺は色々とするから」

朝早いしみんなまだ起きてないので俺は朝食でも作ろうかなと思いキッチンに向かう。これでも俺は料理は得意中の得意である。病気が発症してから休みがちな俺は家にいることが多く、母さんの料理を手伝うことが多かった。だからどんどん料理の腕が上手くなり、今じゃ母さんと料理当番を交代できる具合上手になった。ついでにこの家で俺と母さん以外に料理を出来る人間はいない

「料理って楽しいなぁ～」

味噌汁を作りながら俺は思わず鼻歌じみた声をだしてしまう

「あら、随分早いのね夜絆」

「あ、母さん。おはよう」

俺が料理を作っていると母さんが起きてきた。いつもこの時間に起きているせいかあんまり眠くはなさそうだ。母さんは日本人ではなく日本人とイギリス人のハーフらしく、少し日本人風な顔つきとは

違い、髪もブロンド。外国風な顔つきだが普通に綺麗である。あと俺は、母親よりは父親似と言われているので顔は日本人風だ

「体調は大丈夫なの？」

「今日はね。なんか久々に体調がいいんだ」

「そうなの？ならいいけど…あんまり無理しちゃ駄目よ？」

「わかってるよ。今日は大丈夫だって…たぶん」

「そういってこの前倒れたばかりじゃない？」

「そ、そうだっけ？で、でも仕方ないじゃん。そういう病気なんだし」

俺の病気は不確定な周期毎に発作が起こり、俺を苦しめるっていうもの…らしい。らしいっていうのは実は原因不明の病気で治療法も何もかもわかってないという未知の病気だからだ

「だからもうちょっと自分の体に気をつけなさいって言ってるのよ」

「わかったって！今日は本当に大丈夫だから！」

「…わかったわ。じゃあ今日は学校に行ってきなさい。でも体調が悪くなったら直ぐに病院に行くのよ」

「りょーかい」

「さ、一緒に料理を作りましょうか」

俺と母さんは料理を一緒に作り始め、できたのはかなり豪勢なものになった

「お、今日はいつもより豪華だね」

料理を並べ終えたら父さんが起きてきた。父さんは純日本人だ。割と渋いのでダンディなオジサンにも見える

「夜絆が手伝ってくれたからよ」

「そうか、夜絆体調は大丈夫なのか？」

「それ、母さんにも散々言われたよ。今日は大丈夫だって、昨日まであった倦怠感がまるで無いんだから」

「ならいいが…でも油断はするなよ？」

「わかったよ！もう何回も言わないでくれよな～」

「すまんすまん。さ、そんなことよりみんなを起こす時間だな」

「あれ？もうそんな時間？」

時計を見ると針は既に七時半を指している

「じゃあ俺が起こしてくるよ」

「頼むわね」

俺は二階に上がりまず樹理の部屋の前に向かう。ドアには可愛らしい文字で『樹理の部屋』と書かれたプレートがある

「樹理、入るｚ「きゃあ！大変大変！」ブベッ！」

ノックをして入ろうとした瞬間扉がものすごい勢いで開いて、俺はドアと強烈なキスをした後壁に叩きつけられるというコンボを食らった

「お父さん！お母さん！黒がいないよ～！！」

どうやら黒がいないことに気づいた樹理は急いで部屋を出たということなのだろう。にしても朝から災難だ。鼻血が出てきたし…

「痛つっ～！と、とにかく姉さんの方を起こしにいくとするか」

今度は俺の姉さんの部屋、冬雪姉さんの部屋に向かう。ついでに読め方は『ふぶき』だそうだ。これで読めるのか？
姉さんの部屋には達筆な文字で『冬雪』と書かれたプレートがある

「姉さん、入るよ」

姉さんの部屋は基本的に何もない…無いっていうのは女の子らしいものが無いという意味だ。質素な机に洋服タンス、本棚にはびっしりと敷き詰められた参考書と武道の指南書しかなく、他にはパソコンが一台と、組み立て式の簡易ベッド一台しかない同じ女である樹理の部屋とは天と地ほどの違いがある
姉さんは簡易ベッドの上で寝ているのだが…正直目のやり場に困る光景が広がっていた

「くっ！いつもちゃんと服を着てっていってるのに…！」
羞恥心があんまり無いのか下着で寝ている。樹理の成長していない体に比べると、実りに実った巨大な果実が二つあるのだ。思春期、じゃなくても年頃の男の子なら誰でもドギマギするだろう

「ね、姉さん？朝だよ、起きて」

「ん……なんだ夜絆、もう朝なのか？」

「そうだよ。だから起きて」

モゾモゾとベッドの上で動きをとる姉さん。まだ寝起きなのだろう。だがそれでも自分の長い髪を無意識のうちに纏めているのは習慣だからだろうか？
そんなことを考えていると、目が覚めたのか急に姉さんは俊敏な動きで、身構える

「ど、どうしたの姉さん？」

「…夜絆。お前も年なのだから仕方ない事とはいえ自分の姉に欲情するとは…」

「へ？」

よく考えてみたら俺は今鼻血が出ていてそれを手で覆っているのだ。これはどうみても性犯罪者にしか見えない

「ち、違うって！これはさっき鼻をぶつけて！」

「お、お前が望むなら私は…」

そういって頬を紅潮させ、恥ずかしそうにブラジャーのフックをはずそうとする姉さん

「何を勘違いしてるんだよ、姉さん！！俺はそんな疚しいことなんてこれっぽっちも…」

自分で言っといてなんだが、さっき目のやり場に困るって言った俺が疚しい事を考えていないなんていえるのだろうか？

「大丈夫だ、私も初めてだから問題は…」

「あるわぁ！！問題しかねぇよ！それで何が解消されるんだよ！？何が大丈夫なんだ！？」

「む、夜絆は我が侭だな」

「…はぁ、なんかさっきまであった元気が一気になくなったよ。とにかく朝食だから早めに降りてきてね」

「わかった」

姉さんの部屋から出た俺は自分の部屋に戻り、制服に着替え、一階のリビングに戻る

「夜絆！みんな食べてるから、あなたも早く食べなさい」

「はいはい」

俺は自分の席に座り、朝食である味噌汁を啜る

「あれ、夜絆兄学校に行くの？」

「悪いかよ？」

「ううん、珍しいなって思っただけ。でも久々に見たね制服姿」

「そうか？」

「うん！今日は顔色もいいよ！」

「まぁな。今日は調子がいいんだ、俺の体調もお前の寝癖もな」

「え？」

樹理の髪の毛の中から一束だけ寝癖がぴょんっと生えている。樹理の顔と髪は母さん似なので欧米な顔つきに、ブロンドの髪をしている

「わわっ！さっき治したはずなのに～！」

自分の手で髪を戻そうとする樹理だが、何度やっても寝癖が直ることは無い

「別にいいじゃんそれで。それが樹理のチャームポイントみたいなもんだろ？」

「な、なんで知ってるの！？」

「母さんから聞いた」

「もう、お母さん！」

樹理と母さんでごちゃごちゃと何かを言い合っているようだ

「まぁまぁ、樹理。少し耳を貸しなさい」

「…なによ？」

母さんは樹理に何かを耳打ちする。すると樹理は顔が真っ赤になり、持っていた箸を落とした

「か、母さん！」

「ふふっ、頑張りなさい」

「はは、仲いいね樹理と母さんは」

二人のやり取りに笑顔な父さん。この人は昔から少し天然っぽいのだ

「なにやってるんだか…」

「よ、夜絆兄！」

「なに？」

「きょ、今日帰りｄ「夜絆、そろそろ出ないと学校に遅れるぞ」ね、姉さん？」

樹理が何かを喋ろうとした時7、それを遮るように姉さんから忠告

を貰った

「もうそんな時間なんだ。なら行くか。…で樹理は何か用？」

「い、いや！な、なんでもないよ！！」

「そう？ならいいけどさ。樹理も早く用意しないと遅刻するぞ」

「あっ！やばい！早く着替えなきゃ！」

まだパジャマ姿の樹理は急いで自分の部屋に着替えに行った

「じゃあ俺は先に行ってくるわ」

「一緒に行かないのか？もし学校に行く間に体調が悪くなったら困るだろ」

「大丈夫、今日は一人で行きたい気分なんだ」

姉さんからの誘いを断り、俺は家を出発した

プロローグ1（後書き）

ご意見・感想お待ちしております

プロローグ2（前書き）

一応手直ししたものです。この後もプロローグ的なものが多いです

…

プロローグ2

ｓｉｄｅ　夜絆

「今日もいい天気だな～」

七月中旬の今は太陽が毎日元気に頑張っている。そのせいか毎日毎日快晴続きだ

「雲が一つもない空か…何故か気分が下がる」

快晴なんだから雲がないのは当たり前だが、少しはあってもいいような気もする。そんな事考えてたら俺が通う高校である私立不動高校が見えた

「げっ！今日もいんのかよ…」

校門の前に柄の悪い連中を見つけた。あいつらはこの学校にいる不良でなんかよくわからない理由で一度因縁を付けられてからというもの何度も嫌がらせをしてくる

「校門からは駄目だな…ならば！」

校門から学校に入ることを諦めた俺は学校の周りにある金網の壊れた部分から学校に侵入する。この学校の金網は設置されてから十年程整備されてないので至る所に穴が開いているのだ

「ふぅ、これで一安心」

俺が侵入した場所はグラウンドの隅の方にある部活塔の裏手の空き地。ここには放課後以外誰も来ないような場所なのであの不良連中に見つかることは無い

「そうか、それはよかったな。夜絆」

「げっ！姉さん…」

俺が安堵のため息を漏らした途端、姉である冬雪に会ってしまった。なんでここにいるんだろう？俺のほうが先に家を出たはずなのに…

「自分の姉を見てそんなに嫌そうな顔をするとは…少し傷つく」

「そ、そういう意味じゃないって！ただなんでここにいるのかな～って思っただけで」

姉さんは少し寂しそうな顔になる。こんな顔は見たことが無いので俺はかなり狼狽し、話を適当にそらす

「簡単なことだ。夜絆は校門から入らないだろうと予想はついていた。となれば一番侵入しやすいここから入ってくるのは誰でもわかる」

「もしかして俺って単純…？」

姉に自分の行動パターンを言われたことで少しショックを受け地面にｏｒｚな感じで膝を突く

「だからいつも言ってるだろ？あの不良どもが苦手なら私と一緒に登校すれば問題はないって。なのにどうしていつも断るんだ？」

「いや、その…」

確かに複数で登校すれば不良達もあまりかかわってこないと思う。それが武道を極めている姉さんなら間違いなく絡んでこないだろう。だが、姉と一緒に登校するのはデメリットもある。さっきも言ったが姉は美人だ。しかも生徒会長兼、剣道部主将で男子から絶大な支持を受けている。だから姉弟でも一緒に歩いているのを見られると男子からいやな目で見られるのだ

「どうした？」

「ち、違うよ！ただ、俺だって色々あるんだよ！」

「あっ！」

俺は姉さんの横を全力で駆け抜け一気に校舎へと走っていく

「はぁ、はぁ、まったく少しは自覚して欲しいよ…」

全力で走った俺は息を切らして下駄箱に寄りかかり、自分の姉に対するちょっとした愚痴をはく

「何を自覚して欲しいの？」

「うわっ！な、なんだ未玖か…驚かすなよ！」

いきなり下駄箱の横から俺より頭一つ分小さな女子が飛び出し、俺を驚かした。この女子の名前は華燐未玖。同じ高校生なのに今だ中学生と間違われるのが悩みというある意味幸せな奴。こんな悩みしかないから性格は軽くて無邪気なまだ子供っぽい奴だ。俺も同級生というよりは妹のように扱っている。実際に妹もいるので扱いにはそう困らない

「へへー！無防備にしてる夜絆が悪いんだよ！」

「なんだとこの野郎！」

「未玖は野郎じゃないですー！」

「屁理屈言いやがって！お仕置きだ！」

俺は未玖の頭を軽く拳骨し、説教する

「痛い！女の子に暴力振るうなんて最低ー！」

「人を驚かす奴に言われたくねぇよ！ったく、先に行くぞ」

「あ、待ってよー！」

俺は未玖を放置して自分のクラスに向かっていく

「…それにしても久しぶりだね」

「なにが？」

「夜絆が学校に来るの。最近はあんまり来てなかったから」

「…ちょっと最近は体調悪くて」

本当は虐められて学校に行きたくないから仮病で休んでいた…とは言えないので適当な嘘をつく

「あんまり無理しちゃ駄目だよ？」

「わかってるよ。心配してくれてサンキューな」

「へへ～！」

俺が未玖の頭を撫でると未玖は嬉しそうに目を細め、されるがままの状態だ。小さい頃の樹理と黒を彷彿させる

（こいつ頭撫でられてそんなに楽しいのか？）

年下扱いされて嬉しそうにするこいつはどうなんだろうか…

「仲いいなお前ら」

「っ！……なんだ太一か」

いきなり肩を叩かれ、驚き振り返る。そこには俺の小さい頃からの親友華燐太一がいた。まぁ苗字でわかると思うけど未玖の兄。ただこの二人は血が繋がってないそうなので実際には兄妹のような上下関係はまったくといっていいほどない。太一は小さい頃から遊んでいる仲間の一人である

「なんだは無いだろ。久々に親友に会ったんだ、もう少し嬉しそうにしろよ！」

「嬉しいけど驚かす必要あるか？」

「もう！太一、驚かさないでよね！」

「…それを未玖が言うか？」

先程驚俺を驚かした未玖にとやかく言う資格はあまり無いと思うが、当の未玖は聞いていないようである

「悪い悪い、でもそろそろやめといたほうがいいぜ」

「「なにが？」」

俺と未玖は同時に首を傾ける

「はぁ、未玖ちょっとこっちに来い」

「う、うん」

「俺は？」

「夜絆は聞かなくていいんだよ」

太一はため息を吐きながら、未玖をつれて少し離れた。二人はヒソヒソ声で何かを喋っている。めっちゃ気になるんですけど…

「二人ともなに話してんの？」

俺は二人の傍により声をかける

「い、いやなんでもねぇよ！な、未玖？」

「う、うん。気にしなくてもいいよ！」

二人は慌てたように気をそらしてきたので、深入りしちゃいけないと思って聞くのをやめた

「そう？ならいいけど早くしないとチャイムなるぞ」

「やべっ！じゃあな夜絆、帰りにどっか行こうぜ！」

「おう！」

太一は俺や未玖と違うクラスなので急いで自分のクラスに向かっていった

「それにしても太一となにはなしてたんだ？」

「えっ！な、内緒だよ！夜絆には教えない～」

「なんだよそれ…なんかすげぇ疎外感感じるんだけど」

「気にしない気にしない！さ、早く教室に入ろう！」

いつの間にか俺のクラスである二年Ａ組の教室前に来ていた

「あれ、もう着いてたか？なんか感覚がおかしいな」
長く来てなかったせいかどうも調子が狂う
「長い間来てないからだよ！」
「…そうかな？」
未玖にも同じ事を言われる。そんなに俺の考えは読みやすいのだろうか？俺はそんな事を考えながら教室のドアを開ける。すると全員がこちらを見て驚愕の表情を浮かべている光景があった
「…おはよう」
なんか気まずい空気が流れていたので俺は小さく挨拶をする
「おはよー！夜絆元気にしてたか？」
俺が自分の席に向かおうとしたら明るく元気な挨拶をしてくる少し肌の焼けた女生徒がいた。彼女の名前は小林麻美。この学校にある陸上部と剣道部に所属しているスポーツ少女で陸上部にいたせいか肌が少し焼けているみたいだ。ついでにこいつも小さい頃からよく遊んでいる仲間の一人。まぁ遊んでたというよりは襲われてたな…武力で
「麻美…体調不良で休んでた人間に言う挨拶か、それ？」
実際には俺は仮病で休んでいたので体調が悪いというのは嘘である
「まぁ、気にしない気にしない！それよりよく来たね！噂じゃ夜絆

は二度と学校に来ないって言われてたんだけどな～」
麻美は俺に挨拶し終わると、隣にいる未玖をジト目で見る
視線を食らった未玖はばつが悪そうに視線を逸らすしている。何があったのやら？
「はぁ？…まぁ、あながち間違いじゃないけどさ」
この前起きた発作は酷くもう少しで天国に行きかけたから、運が悪かったら二度と来なかっただろう
「そ、そ、そうだよ！ま、間違ってぃっ痛っ！」
焦って喋ったせいで舌を噛んでしまった未玖
「なに舌噛んでんだよ？それに呂律も全然上手く回ってないぞ」
「それはね～やm「ああ！駄目だって！」モゴモゴ」
何かを喋ろうとした麻美の口を慌てて塞ぐ未玖
「？仲がいいのはいいけど、そろそろチャイム鳴るし席に座ろうか？」
「そ、そうだよね！ほら、愛美も早く自分の席に行くよ！」
「はいはーい。じゃあね夜絆、ホームルームの後にまた喋ろうね」
「わかったわかった」

愛美と未玖は席が隣なので一緒に向かっていった。俺も自分の席に鞄をかけ着席する。
俺の席は窓側の一番後ろで、未玖や愛美の席は窓側から二番目の列の一番前とその後ろなので喋るには少し距離があるが、先生からあまり目を付けられない場所なので昼寝にはもってこいだ
そして時計の長針が9を指し示した時チャイムが鳴り、担任の先生が入ってきた

「おはよう！早速だが点呼をとるぞ！安達！」

「はい」

来て早々担任はいきなり点呼を開始した。俺は名簿の順番だと後ろの方なので呼ばれるまで時間がかかる

「矢部！」

「はい」

「夕月…は今日も休みか？」

「いますよ」

「おお！夕月来ていたのか！体調は大丈夫か？」

「今日は大丈夫です」

「そうか、だが無理はするなよ。少しでも体調が悪くなったら保健室に行け」

「わかってますよ」

「よし！点呼は以上！久々にクラス全員が集まったな！」

先生のこの言葉を聞いてクラスの表情は二分化された。男子は一斉にいやそうな顔をし、女子は殆どが嬉しそうにしている。前者は俺に対する妬みだろう。なんか妬みを買うんだよな、たぶんあの姉妹がいるせいだ。美人な姉妹は持ってると怖いな。後者はよくわからない

「じゃあ今日は特に重要な事はないからホームルームはこれで終了だ。一時限目の用意をしておけ」

そういって担任の教師はクラスから出て行った。俺は未玖と麻美がいる席に向かおうとするがその前に大量の女子に囲まれてしまう

「夜絆君、久々だね！本当に体調は大丈夫？」

「心配してくれてありがとう、さっきも言ったけど今日は大丈夫だよ」

「よかった～」

（随分優しいんだな。みんな俺を心配してくれたのか）

なぜか安堵の息を漏らす女子に俺は不可解としか言いようが無い

結局女子たちと話している間に休み時間は終わり未玖達とは話せ無かった。そしてこの後退屈でつまらない授業が始まることになる

プロローグ2（後書き）

ご意見・感想お待ちしています

第一話　人生の転換期（前書き）

この小説をお気に入りしてくれた皆様にお礼を申し上げます！
なかなか話が進まなくてすいません

第一話　人生の転換期

ｓｉｄｅ　夜絆

「はぁ～、やっと終わった～！」

一・二・三・四時間目のすべての授業が終わり、今はやっと昼休みになった。俺は偶にしか来ないからあまりわからないが、みんなこんな拷問の様な授業を受けて平気なのか？と考えてしまう

「やっと終わったって…夜絆はずっと寝てたじゃない？」

授業が終わって弁当箱を持ってきた未玖が余計なことを言う

「…それは言ったら駄目だって」

実際、さっきまで寝ていた。こっちはない眠気を必死に出して寝ていたのだ。責めるではなくむしろ褒めてほしいもんだ

「はいはい。じゃあお昼食べようよ」

「…お前のその会話の切り返し方は俺にはわからん」

「気にしない！」

未玖は勝手に弁当箱を机の上に広げ、食べ始める

「夜絆～、一緒にたべｙってもう先客がいたか」

「別に一緒に食べてもいいだろ。…少し狭いけど」
流石に学校の小さな机で三人一緒に食べるのはきついが無理な事ではない
「そうだね、じゃあ私も一緒に食べよっと」
麻美も弁当箱を広げ食べ始めたので、俺も弁当を食べ始める
「そういや俺が休んでいる間に何か変わったことあった？」
「なんで？」
「聞いてみただけだよ」
「んー、そんなに変わったこと無いかな？麻美はなんか知ってる？」
「えーっと、冬雪先輩に恋人が出来たとか聞いたけど…」
「「マジか！？」」
未玖と一緒に大声を出してしまった
「あの姉さんに恋人ができるとは…相手はいったい？」
変な言い方だけど家の姉さんにはそういう事はまったく興味が無そうなイメージがある。だから全然信じられないのだ
「三年の誰かだって。まぁ噂だからなんとも言えないけど。でも最近冬雪先輩はよく部活を休んでいるからそのせいじゃないかな？」

「へー、部活休んでデートか。……駄目だ、全然想像できない」

「まぁ、夜絆のお姉さんってそういうことに興味なさそうに見えるもんね。でも校内じゃ人気高いよ。冬雪さんもそうだけど妹の樹理ちゃんのほうも」

「えっ！樹理も人気があんのか！？」

初耳な情報だ。まさか姉さんだけじゃなく、樹理までモテるとは…なんか物凄い敗北感

「知らないの？今年の一年生で五本の指に入るって言われてるよ？」

「初耳だよ。あいつとはあまり話さないし、一年のところに行く用事も無いからな」

「あれ？でも少し前まで一緒に遊んでなかったっけ？」

「俺が高1の時までな。二年になってから急に病状が悪くなったからそれ以来あまり遊ばなくなったよ。俺を気遣ってんだろ」

ほんの半年前までは普通に遊んでいたのに、最近は少し反応が素っ気無い。今朝は少し違ってたようだが

「そういえば急に休むようになったよね」

「そうそう、しかも二年になって始めて来た時なんかびっくりしたよ。全部白髪になってたし」

俺の髪が白くなったのは二年に入るちょっと前なので。この白髪はあまりなれない

「ま、気にしなくてもいいだろ。髪が白いのぐらい」

「いや、無理でしょ」

「なんで？」

「だって染めてるようにしか見えないよ、それ？」

「どこの世界に白髪に染めたがる奴がいるんだよ。それに生徒指導に呼ばれたこともないし問題ないだろ」

一部では休みあけデビューしたとか言われたけど、それって夏休みとかにしか言わないと思う

「ま、それもそうだね」

未玖は興味をなくしたように弁当を一気に食っている
だが逆に俺の食はあまり進まない

「「ご馳走様！」」

「二人とももう食ったのかよ…」

「夜絆が遅すぎるだけだと思うよ？もう食べ始めてから二十分経ってるし」

「そんなにか…？う～ん、今はそんなに腹へってないんだよな」

あまり動いたりしない俺には空腹が訪れる事はすくない。むしろ動かない分、エネルギーがあるのであまり食べないのだ。一日二食ぐらいだし

「食べないなら片付けたほうがいいよ。次は体育だから」

「そうだな。見学でも体操服には気がえなきゃ駄目だしnっ！？」

「「夜絆！？」」

立ち上がろうとした瞬間、急な眩暈に襲われ体制を崩してこけてしまった

「大丈夫！？」

「だ、大丈夫。少し眩暈がしただけだから」

「でも、顔色悪いぞ？本当に大丈夫か？」

「ちょっと体調が悪いだけだって。保健室に行って寝れば治るよ」

本当はさっきからどんどん眩暈が酷くなっていくのを感じるが、ここで正直に言うとまたこいつらに心配かけるから俺は平静を保つことにした

「付き添おうか？」

「だから大丈夫だって！あ、体育の先生に保健室に行ってるって伝えといて」

「う、うん」

未玖に用事を頼み、俺はフラフラしながらも保健室へと向かった

「し、失礼します」

「あら、夜絆君。どうしたの？」

保健室の扉を開けると保険医の先生がいた。この先生の名前はまだ知らない。というか俺はまだこの学校の先生の半分も覚えていない

「ちょっと眩暈がするので、ベッド借りていいですか？」

「いいわよ。でもそれは夜絆君の持っている持病のアレかしら？」

「さぁ、わかりませんが。フラフラするので休みたいです」

「そう…一応かかりつけの病院に連絡入れとくわね」

「…はい」

返事をした後俺はベッドに倒れこむように横になり、それから動くことも出来ないほどの倦怠感が俺を襲う

「夜絆君！？」

先生の心配する声を聞いた瞬間俺は倦怠感に呑まれ意識を完全に失い気絶した

「こ…こは？」

目を覚ました俺は周りを見る。そこは見たことが無いほど綺麗な場所だった。周りは一面の花畑、何の花かはわからないが花のいい香りと色のバランスがとておマッチしている。そして中央に噴水があり、ここあら出ている水はまるで天然水のように濁り気の無い純水にも見える。俺は噴水の傍で横たわっていた

「…こんなに綺麗な場所あったっけ？それに…」

もしこれが夢だとしても俺の記憶の中にこのような場所は見当たらないし、花が好きなわけでもない。だが今はそんなことよりも気になることがあった

「人が…誰もいない？」

こんなに綺麗な場所なら観光客の一人や二人ぐらいはいそうだが、人気が全くない。先程夢ではないことを自分で決めたので、さらにおかしいことに気づく

「誰もいないわけじゃないよ？」

「うわっ！吃驚したぁ～！」

いきなり背後から肩を叩かれ俺は振り返る。俺の背後に現れたのは銀髪の青年。日本人離れした顔つきに、太陽の光を浴びた髪はまるで銀を頭にかけたかのようにキラキラと輝いている様にも見える。外見を見る限り俺と歳はそう変わらなさそうだが、どこか不思議な雰囲気を漂わせている青年だ

「な、なんですか貴方は！？」

なぜか敬語で話してしまう俺。たぶん先程の不思議な雰囲気が年上を思わせるからだろう

「う～ん、話せば長くなるから単刀直入に言うけど天使…っていう表現が君の頭の中では一番合ってるかな」

「は？」

ニコニコした顔で意味不明なこと言われた俺はふ抜けた顔になる。天使…俺は宗教に興味は無いから具体的な姿は思い浮かばないが、人間の姿をして羽が生えて、頭の上に輝く円環があるという存在が一般的だろう。だがこの青年には羽はおろか円環すらない

「えーっと、天使ってあの天使？」

「あの天使って言うのは知らないけどたぶんその天使だよ」

さっきから馬鹿げた事をニコニコした顔で言う青年に俺は不信感を抱く

「君の名前は？」

だがそんな俺の態度を無視して青年は自己紹介を求めてきた

「夕月夜絆」

何故か不信感があるのにすんなりと答えてしまう

「夜絆君か…うん、いい名前だ。僕の名前は…言わなくていいか」

「なんでだよ！？俺が名乗ったのにお前が名乗らないなんて不公平だろ！」

「だって夜絆君に教えたとこで意味がないし、僕は自己紹介なんかしたくないからね。それより君に聞きたいことがあるんだ」

…なんていうかこの青年はマイペースなようだ。少し苦手な性格である

「…なんだよ？」

「どうして君はここにいるのかな？」

「そんなの俺が聞きたいよ！俺だって目が覚めたらいきなりここにいたんだ！」

よく考えたらなんで俺は慌てていないのだろう？普通に考えて、こんなところにいきなり来たら戸惑うはずだ

「ふーん、それは困ったね」

「なんで？」

「ここはね俗に言う三途の川なんだよ」

「三途の川！？ってか俺死んだの！？」

自分が死んだということにも驚いたが、なにより想像していた光景

と違うことに戸惑う。なぜなら周りには綺麗な花が咲き誇っているだけで川なんてものは見当たらない

「三途の川って死んだ後に渡る川の事だろ？でもここら辺に川なんて見当たらないぞ！」

「あるじゃないか、ここに」

青年が指差したのは先程から綺麗な水を出している噴水

「はぁ？これのどこが川なんだよ！」

「疑うなら噴水の水の中に顔を突っ込んでごらん？」

「…わかったよ」

俺は半信半疑のまま水の中に顔を突っ込む。噴水の中は透き通った綺麗な水しかないので一番下まで簡単に見える

（ただの綺麗な水があるだkっ！なんだ、あれ！！）

噴水の下の方から無数の手が生えてきて俺の頭を思いっきり掴む

「（くそ！離れろ！！）ガボォ！」

俺は噴水の中で力いっぱいもがくが手の力は強力で、振り払うどころかどんどん俺の身体を水中に引っ張る

「（やばい、息が…）ガボガボ…」

「はーい、大丈夫？」

もう少しで引きづり込まれるというところで俺は青年に引き上げられる

「ガハッ！ゲほっゲほっ！」

俺は手から解放されたが大量の水を飲んでしまった為むせた

「危なかったね～、後もう少し水の中にいたら君は今頃死者の仲間入りだよ」

「ゲほっ！い、今のは？」

「死神だよ。まぁ下っ端だけどね。それはともかく君をこれからどうしようかな？君はまだ死んでないし」

「え？お、俺死んだからここにいるんじゃないのか？」

三途の川＝死んだではないようだ。いや、あの手に引き込まれたら死は確定するのか？

「君はまだ死んでないよ。だって死んでたら君はもう噴水の中に引き込まれてるはずだしね。たぶんだけど君は今、生と死の境目なんだよ」

「じゃ、じゃあ俺はまだ死んでないんだな！」

俺は飛びかかるように青年の胸ぐらをつかむ

「…そんなに嬉しい？」

「当たり前だろ！俺はまだ死ぬ気はないし、もっとやりたいことが沢山あるんだよ」

「…そうかい、でもそれは叶わないね」

「なんでだよ！」

「だって君は今死んでないって言うだけでもうすぐ死ぬ運命だからね」

「…え？」

俺はさらりと告げられた死の宣告に対し素っ頓狂な声を出した

第一話　人生の転換期（後書き）

ご意見・感想お待ちしています

第二話　天使との邂逅、そして究極の選択肢（前書き）

久々更新…全然執筆の時間が無い…愚痴ばっかりですいません

第二話　天使との邂逅、そして究極の選択肢

ｓｉｄｅ　夜絆

「えっ？」

「だからもう君は死ぬの。正確にはあと一日と二時間ぐらいで」

「ちょ、ちょっと待て！そんなに早く死ぬのか！？」

「うん」

青年はさらりと俺に死の宣告を言い渡した…もう少しシリアスに言ってほしい

「……あんまり長くは無いと思ったけど明日には死ぬのか……」

「まぁ諦めなよ、君の死は決まってることだしね」

「簡単に自分の人生を諦められる奴がいるかよ！まだやりたいことだって沢山あるんだ！」

「ふーん。でも君の体はもう限界だからね。やりたいことがあっても出来るわけないよ」

「そ、そんな……くそっ！」

俺は湧きあがってくる苛立ちを晴らすために地面に拳をぶつけ、八つ当たりをした

「それにしても君は気にならないのかい？」

「……なにがだよ？」

「君の病気のこと」

「俺の病気？そんなもんどうでもいいだろ…もう死ぬんだろ？」

「まぁまぁ、そう悲観せずに少しは考えてみなよ。君の病気はもしかしたら病気じゃないかもしれないよ」

「……どういうことだよ？」

「この世に治療法はおろか原因も進行を止める方法も無い病気なんてあるわけないじゃないか」

そういえば医者も匙を投げてたいたのを思い出した

「……まだ見つかってない未知の病気だって世の中にはあるだろ・」

「そりゃあね。でも原因も何もかもわからないということは流石に無いよ」

「じゃあなんなんだよ！」

「君のそれは『業』と言われる呪いかもしれない」

「業？」

「うん。業といのはね自分の前の人生、前世で犯した罪の分呪われるという物」

「前世での罪？」

「そうだよ。つまり君は前世では極悪人だったって事だね」

「……そんなの今の俺に関係ないだろ！俺は俺だ！前世のことなんか知ったことじゃない！」

俺はキレて青年の胸倉を掴み、怒鳴り散らす。だが青年は相変わらず笑顔のままだ

「確かにね。君からしたら身の覚えの無いものだ。だけどねそれが業なんだよ。一度犯した罪は何度も生まれ変わり浄化をしていくことで初めて祓えるのさ」

「それじゃあ俺はこれから何度も妙な病気で死ぬことを繰り返すのか！？」

そんな人生に意味はない。だって俺はまだ人生の１／４も生きていないんだ

「たぶんね。君はこれから果てしない時を無駄で無意味な人生を繰り返していくんだよ」

「なんだと！」

今の言葉で完全にキレた俺は青年に向かって拳を振りかざすが…

「だってそうだろ？生きようと努力したところで君は一定の年齢で死ぬ。しかもその時は早い、幸せ一つ掴むのも無理な時間だ。これを無意味な人生といわずなんというんだい？」

「ぐふっ！……く……そ……」

簡単に避けられカウンターの要領で蹴りを食らい吹っ飛ばされる

「でも僕はそんな哀れな君を助けたいと思うんだよ」

「たす……ける？」

「そう。これを見てごらん」

青年が取り出したのは赤色の鉱石。鉱石は透き通っている宝石とはまるで違い、禍々しく澱んでいる様に見える

「これは時玉石っていってね。時を遡る事のできる石なんだよ」

「時を……？」

「そうだよ、でもねこれを使うと恐ろしい代償があるんだ」

「……」

「使用者はねこの世で最も残酷な業を受けるんだ、この世から消滅するって言うね」

「消滅？」

「消滅だよ。簡単に言えば輪廻転生の輪に二度々と入ることが出来なくなるという事さ」

「それって……俺は一度死んだらもう二度と新たな人生を歩めないってことか？」

「うん。でもこれを使えば運命に抗うことも出来るし、君のその無意味な人生を変えることだって出来るよ。僕って優しいな～」

「……」

青年は笑顔で自画自賛をする。だが俺は色々と考えていた。運命を変えるって事は幸せなはずの未来を不幸に変えたり、その逆の不幸を幸せにしたりすることも出来るということ。一見いい提案だと思うが、それは他人の人生を歪めてしまうことに繋がる。それに…

「で使い方だけd「断る」へ？」

「いいよ、別にそんなもの使わなくても」

「で、でも自分の人生を変えることが出来るんだよ？」

「……それってさ魅力的に見えるけどさ、自分の今までの人生を全部否定するってことだよな？」

「んー。見方によってはそうかもね」

「なら俺はそんな石使わない。たとえ無駄な人生を歩むことになっても自分で自分を否定したくないんだ。」

「……ふーん、人間の考えることはよくわからないな。でもさ、君がそんな歳で死んだら周りの人はどう思うかな？」

「え？」

「例えば君の両親は自分達を責めるだろうね。自分の息子に対して何もしてやれない後悔と自責の念に囚われてね」

「そ、それは……」

あの優しい父さんと母さんのことだ。そういったものに囚われ、後悔し続ける可能性は十分にある

「もっと言えば兄妹や友人達は仲のいい君が死んだら悲しむだろう。もしかしたら心に傷を負うかもしれないよ？」

「そ、それは言いすぎだろ！俺にそこまでの影響力は無いよ！」

「どうかな？まぁ死んでみたらわかると思うけどね」

「それじゃ確かめようが無いだろ！」

「なら迷っている君に選択肢を上げよう」

「選択肢？」

おそらくこれから言われることは俺の人生の中で一番重要な選択肢だろう

「一つはこのまま業に呑まれ無意味な死を遂げた後、何度もたくさ

んの人を悲しませる無駄な人生を繰り返す事。二つ目はこの時玉石を使って過去に遡り運命を変えるか、この二つだよ」

「……そんなの選べるかよ！どっちも俺の周りの人の運命を変えたり悲しませるだけじゃないか！」

「そうかな？一つ目はともかく二つ目はまだ可能性があるじゃないか。もし誰かに不幸が訪れたらその不幸を取り払えばいい」

「そんなことできるわけないだろ！」

「できるさ」

青年は真剣な顔つきになり即答した

「人間は可能性の生き物。どんなことでも不可能なことは無いといわれている生物。なら自分の可能性に賭けてみようと言う気にはならないかい？」

「でも！……そんなこと……」

「やれやれ、ここまで聞いてまだ迷うのか。なら君にある能力を与えよう」

「能力？」

「正確には可能性を引き出すだけどね。動かないでよ」

「な、なにをするんだ…？」

青年は俺の額に人差し指をつけ一瞬だが悪魔の様な笑みを浮かべた

「少し痛むからね」

「えっ？あ、あぁぁぁぁ！！！」

指はずぷっと言う音と共に俺の額を液体に沈むかのように貫通し、俺の頭の中を直接触る。俺は痛みと今起きている事のショックで想像を絶するような衝撃を受けていた

「ん～、なかなか見つからないな。…お、あったあった」

青年は何かを探すかのように俺の脳内を掻きまわす

「ここをこうして……よしこれでオッケーだね。お疲れさん」

「あぁぁぁ！！ぁぁ……はぁ、はぁ、な……にを？」

青年は頭の中で何かをした後、指を抜いた

「いったろ可能性を引き出すって。まぁおきたら覚醒してるとは思うから安心しなよ」

「教えろ……！」

「やだよ。君が得る能力は君の人生を大きく左右するものだから。覚醒した時に使い方とかを考えるんだね。それとこれを渡しておくよ」

渡されたのは先程の時玉石。それを青年は俺の右手にギュッと握ら

せる

「こんな物はいらない！」

「まぁ持っておきなよ。あって損するものじゃないから。それにね君はその石を確実に使う。これは予言じゃない、決められた運命だよ」

「な、それはどういう意味っ！……」

全てを言い終わる前に急に世界が真っ暗になり俺はもう一度気を失った

第二話　天使との邂逅、そして究極の選択肢（後書き）

ご意見・感想お待ちしております

第三話　選択、そして本当の家族

ｓｉｄｅ　夜絆

「こ…こは？」

目覚めた俺が寝ていた所はベッド。見たものは、白い清潔感のある天井に、周りにはたくさんの機械があり白いカーテンで仕切られている。機械があるということは此処は保健室ではなく…

「病…院？」

たぶんだが急に意識を失った俺を見た保険医が病院に連絡を入れてここに運ばれたのだろう。周りに心拍数を示す機械があるところを見ると結構危ない状況だったようだ

「あれは夢か？それとも…っ！？」

右手に力を入れた瞬間一瞬だが鋭い痛みを感じ、手探りで何かを調べる。ゴツゴツした石見たいなものだ

「まさか…」

かけられている毛布から少しだけ右手を出し、目で見て確認してみるとそこにあったのは赤く濁ったあの時界石があった

「あれは…夢じゃないのか。なら能力っていうのはいっｔっ！！」

能力について呟いた瞬間俺の見ている世界が変わった。さっきまで

白ばっかりだった周りの色は全て青色のようになり、周りに黄色色のたくさんの線が行き交っていた

「なんだよ…これ！」

慌ててベッドから飛び起きる。だが周りの色は青色と黄色の線があるだけだ。一応物体は黒い線で形作られているので周りのものが見えないわけじゃない。だが急に色が変わったことに俺は驚いてしまう

「夜絆！」

「うわっ！な、なんだ父さんか」

急にカーテンが開き、そこには焦った顔をしている父さんがいた

「なんだじゃない！お前身体は大丈夫なのか！？」

「え…う、うん。今はなんとも無いかな」

実際には周りの景色の色が青色と黄色色に染まっている…いや、父さんは黄色い線が身体中に張り巡らされているように見える。それだけじゃなく頭の部分には赤色の塊があった

（あれは…いったいなんだ？）

「ふぅ、なら安心した。お前が急に倒れたって聞いて吃驚したぞ」

「ご、ごめん」

落ち着いた父さんは備え付けの椅子に座り一息ついている

「謝るなら僕にじゃなくて、太一君や未玖ちゃん達に言うんだね。みんな随分心配してたぞ。それに冬雪と樹理もな」

「…うん、そうだね。ところで今何時？」

「今は夜中の三時ぐらいだね。それがどうかしたかい？」

「いや、単に時間が気になって」

もうそんな時間ってことは俺の命はあと少しということ…みんなに謝るなら明日の朝にでもしないと間に合わないな

「さて夜絆が起きた事をみんなに知らせなきゃな。少し待ってなさい」

「わかったよ」

父さんは立ち上がりそのまま病室を出て行こうとする。そしてあの赤い塊はどんどん大きくなっていくのを不審に思った俺はそれを凝視する。すると何かが俺の頭の中に入ってきた

「ぐっ！」

「っ！どうした夜絆！大丈夫か！？」

入ってきた何かは俺に頭痛を引き起こさせる。そしてある言葉が頭の中に響いた

【なぜ僕は夜絆になにもしてやれないんだ！！】

（これは…父さんの心の声？）

もう一度父さんを見ると赤い塊は無くなり、黄色色の線が張り巡っている状態だ

「だ、大丈夫。少し頭痛がするだけだから」

「そ、そうか？あまり無理をするなよ」

「…わかってるよ」

父さんは病室を出て行った。今のはいったいなんだったんだろう？あの声は父さんの声だった、だけど実際には父さんは俺に大丈夫かという言葉しか言ってない。しかも俺はあれを直感で心の声と感じた

（今はさっきの事を考えるより先にこの状態をどうやったら止められるかを考えよう）

周りが青色の世界になった時俺は能力という単語を言った。ならもう一度能力といえば解除できるかもしれない

「能力…駄目か」

言ってみたが周りは青色の世界のままだ

「なら…解除とか」

解除といった瞬間世界は元の白色中心のものに戻った

（結構安直だな…しかしいったい何なんだろう？黄色の線は父さんの体の隅々まで張り巡らされていた…他に見えた黄色の線は周りの機械に集中していたな）

機械には父さんのとは比較にならない量の黄色の線が張り巡らされていた

「今のは人の心をみることのできる能力みたいなもんか」

俺はそう結論づける事にした。今は情報が少ないし仕方ないだろう

「……」

そして俺は暇になった

「…夜絆」

「なに、父さん？」

再び父さんが病室に入ってきた。何故かはしらないがすごく真剣な顔をして…

「もしかしたらもうお前と話せる時間が無いかもしれない。だからある事を話すよ」

「…ある事？」

不吉としか言いようが無いが実際にはあと半日も生きられないのであながちこれが最後に喋る機会だといっても過言じゃない

「お前は…僕と母さんの本当の息子じゃないんだ」

「…なんか定番的だね。死ぬ前にそれは無いんじゃない？」

死ぬ前に本当の子じゃないってドラマのワンシーンみたいだ

「驚かないのかい？」

「驚いてるよ。でも薄々そうじゃないかって思ってた。だって俺は家族の誰とも似てないしね」

よく父さんと似ていると言われてるだけで実際にはあまり似ていない。白髪になってからは余計に親子に見えなくなっている

「ハハハ、少しだけ僕に似てるんだけどね…まぁ夜絆の本当の父親は僕の双子の兄なんだだから。僕とも似てたんだよ」

「…じゃあ父さんは伯父さん？俺はてっきり捨て子って言われるかと思ったのに…」

「そんなドラマみたいなことは無いさ」

今の段階でも十分にドラマっぽいんだけどな…

「で、父さんのお兄さんは今どうしてんの？」

「…死んだよ」

「えっ？」

「夜絆の五歳の時だったかな。兄さんの家に強盗が入ったんだ」

「…父さんは強盗に殺された？」

「…ああ、兄さんは刃物を持った強盗相手に夜絆を守ったんだ。警察の人教えてくれたんだが、兄さんの遺体はお前を庇うように覆い被さっていたらしい」

「へぇ、…でも何でかな？そのことをまったく覚えてないや」

「たぶんだけど小さい時の夜絆は無意識にそのことを忘れたんだと思う。僕が君を引き取った時には夜絆は僕を見て父さんだと思い込んでいから…」

「そう言われてみれば…」

だいたい個人差はあると思うが小さい時の事をほんの少しぐらいはみんな覚えている。でも俺にはどう遡っても小学生も頃までしか思い出せなかった

「俺の母さんも違うの？なら本当の母さんは？」

「ああ。夜絆の母親はお前を生んですぐに亡くなったんだ…身体があまり丈夫な人じゃなかったんだ」

「じゃあ俺は両親の顔をどっちも覚えてないんだ…」

「…ここに夜絆の両親が写った写真があるよ。ただ高校生の時に撮った写真だからあまり正確じゃないけどね」

父さんに一枚の写真を渡される。写っていたのは学生服を着た若い頃の父さんに似た人と、アイドルの様に整った顔をした大人の雰囲気を醸し出す美女が笑顔で写っていた

「この父さんに似てる人が俺の本当の父さん…じゃあ隣に映っている人が俺の…？」

「そう夜絆の本当の母親、夜美さんだよ」

「…なんか全然釣り合ってないよね」

別に父さんの兄さんが不細工というわけじゃない。むしろ整っている方だが、本当の母親だというこの夜美っていう女性と年齢差があるような気がする。どこか子供っぽいのだ

「そうかな？確かに夜美さんは少し年上な感じはするけど同じ年だったんだ」

「凄い大人びてる…」

俺は写真の女性をまじまじと見る

「夜絆、悪いんだけどいったん僕は家に帰るよ」

「あ、うん。見舞いありがとう」

「気にしなくていいよ。こんな話をした後だけど僕も母さんも冬雪や樹理だって夜絆の事を本当家族の様に思っているから」

「…ありがとう。みんなにもそう伝えといて」

「ああ、わかってるよ」

父さんは病室から出て行った

「…俺はどうしたら！」

俺は究極の選択肢を前に悩み苦しむ。もしあの夢を見ず、この石を渡されなかったら俺は簡単に自分の死を受け入れていた。だが今の俺には選択肢が出来た、このまま死ぬか、それとも過去に戻り未来を変えるか。普通なら迷わず後者を選ぶ…だけど後者は俺の周りの人の未来までも変えてしまうことになる。そうなったら…俺は責任を取れるだろうか？

（でも…あれがもし本当に父さんの心の声なら俺が死んだら父さんは後悔する）

あの自称天使に貰った能力が本物なら、さっきの頭に響いた父さんの声は心、思考の声のようだ

「なら使うしかないのか…？この石を…」

時界石を見つめる。石はまるで迷っている俺を後押しするかのように濁った光を強くした

「あいつの言いなりみたいで尺だけど、それでも俺は…まだ生きたい！」

石の輝きはよりいっそう強くなり、白いはずの病室を赤黒く照らす

「頼む…俺を過去に連れてってくれっ！！」

強く握った瞬間時界石は粉々に砕け、破片が周りを黒く染めていく。まるで世界が無くなっていくように…

「みんな、勝手な俺を許してくれ…」

最後にみんなへの謝罪を残して俺は真っ暗な空間に呑まれていった

（俺は…？）

目が覚めた俺がいたのは病院のベッドではなく、毛布に包まれ誰かに抱かれていた。まだ上手く目が見えないところを見ると赤ん坊の頃まで戻ったようだ。どうやら時間逆行は成功したらしい

「…夜美安らかに逝けよ」

（っ！今夜美って…）

夜美…それは俺の本当の母さんの名前。それに逝ったという言葉で俺は理解した。今は母さんの葬式、そして俺を抱いているのは俺の父さん

「心配すんなって！お前がいなくても子育てぐらい大丈夫さ。俺一人でちゃんと育ててみせる。…例えこの子が障害を持ってたとしても」

（障害！？俺は障害なんて持ってなかったはず…これも運命を変える代償なのか？）

「流石に母乳は出ねーけどミルクぐらい作れるし、おしめも変えられるさ。それに俺とお前のこの子はお前に似て利口そうな顔つきしてるし大丈夫。こいつは立派になるぜ、なぁ？」

父さんは俺の頬をプニプニ指で押し、遊んでいる

「そうだ、こいつの名前なんだけどお前も夜美っていう名前から一文字と、沢山の人達を繋ぐって意味で絆を取って『夜絆』っていうのにしたんだ。どうだ、昔のお前に因んだところもあるんだぜ？」

そういって父さんは俺を高く抱き上げる

「見ろよ夜絆、お前の母さんは美人だろ？お前は母さん似だからな。将来はきっといい男になるぜ」

（あれ？俺は確か父さんの方に似てるって言われてたような…こんなところでも変化が？それに母さん似でいい男になるのか？）

俺はまだあまり見えない目を酷使して母さんの遺影を見ようとする。見えたのは大量の花が置かれた台のなかに一枚の遺影が飾られていた。そこに写っていたのは高校の時よりさらに大人びた母さんの写真だ

（この人が俺の母さん…写真で見たよりさらに美人になってる…し…）

写真には胸から上しか写ってないが整った顔立ちはあまり変わっていない、それに顔ばっかり見てて気づかなかったが艶やかな黒髪もいっそう美人さを引き立てていた

そして俺の意識はここで途切れる。どうやら赤ん坊は一日の活動時間が短いので寝てしまったようだ

第三話　選択、そして本当の家族（後書き）

ご意見・感想お待ちしております

人物紹介　1（前書き）

ははは！説明は深く考えないでくださいｏｒｚ

人物紹介　1

『主な人物』
夕月夜絆（ゆうつきよはん）
『説明（時間逆行前）』
本作の主人公。時を遡る前の病弱なせいか髪の毛は全て白髪になってしまった。ぼさぼさとした髪型に優しそうな目、そして整った顔立ちをしているが本人は自分の容姿を嫌っていた。曰く貧弱に見えるからだからだそうだ。実際には貧弱そうでは無く貧弱なのだが…
『時間逆行後』
時間逆行後、一度だけ母の葬式の時に元からの自我が覚醒するが、それから約三年間の間に自らの自我と記憶が無くってしまった。容姿については逆行前が父親似だったのに対し逆行後は母親似となる。逆行前に謎の天使によって開花されていた能力を引き継ぎ、三歳までに二つの能力を大体習得していた
だが銀髪の天使により逆行前の記憶、人格全てを書き換えられほぼ別人と化している
『特殊能力』
・『信号補足（シグナル・トレース）』
主に電気の流れを見ることを可能にする能力。これを使えば機械や人間の体内を流れる電気信号を見ることが出来る。機械に関しては不具合を確認する程度にしか使えないが、人に対しては相手の動きや思考などを限定的にだが知ることが出来る。ただしこの能力はあくまで電気信号を見るだけであり、それを解析し理解するには高度な演算能力が必要である。長時間の使用や複雑な動き等を解析しようとすると脳への負担が重くなるため頭痛や眩暈を起こすことも…。さらに過度に使用すると脳の限界を突破し一時的に意識が昏倒する。またオーバーロード（オーバーロード）を引き起こした場合、しばらくこの能力は使用できない。なおこの能力は複数に対し使用すると負荷が大き

くなるため注意が必要
発動中は視界が青一色になり、電気信号は黄色、思考などは赤色で表示されている
・『掌握』
電機を操る能力。現在使える能力の中で攻撃的な能力で、主な用途は自らの身体に流れる電気信号を操作し身体を動かす補助的な能力と、相手の身体にも干渉できるのでその気になれば脳自体を破壊することも出来る、非常に危険な能力だ。別の用途として、電子管理をされた金庫のロックを解除して開ける事ができ、パソコン内のデータを閲覧することも出来る。インターネットに繋がっているならば他人のパソコンに侵入することもできるが、インターネットに侵入する際はかなりの負荷が掛かる。また、情報の書き換えも可能な犯罪的能力でもある。しかし夜絆自体はこの能力を気づいておらず、使用していても『信号補足』の応用であると勘違いしている

夕月光一（ゆうつきこういち）
『説明』
夜絆の本当の父親。逆行前の記録では夜絆が五歳になった時強盗に押し入られ、夜絆を庇い死亡している。外見はオールバックの黒髪に、整った顔。
自分の婚約者が死んでしまった反動か、夜絆のことを溺愛している。一応会社を経営していてなかなか裕福な家庭を気づく

夕月夜美（ゆうつきよみ）　旧姓　華衣（かい）
『説明』
夜絆の本当の母親。逆行前も逆行後も夜絆を生んですぐに死亡している。大人びた顔つきの黒髪美人
銀髪の天使？

『説明』
夜絆に時玉石を渡した張本人。三途の川の万人の様なことをしているが元は天界にいる大勢の天使を束ねる大天使。謎が多くあまりわかることはないが、自分の楽しみのためならば人間や天使、果ては神までも利用する極悪人。夜絆に能力を与え、人格と記憶を書き換えた張本人

夕月輝美（ゆうつきてるみ）
『説明』
本李存在しないはずの夜絆の妹。血は繋がっておらず、夜絆が四歳の時に光一が連れてきた捨て子。だが実際には銀髪の天使によって貶められた天使。銀髪の天使によって名前と天使としての力を奪われ、人間として転生させられた。なお、夜絆に対してはよっぽどじゃないと逆らえないよう呪縛が掛けられている。夜絆のこともよく知っており殺したいほどの憎しみを持っているが……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8402s/

時間逆行！人生のやりなおし！！

2011年9月26日19時15分発行